



Title	アイヌの血統とアイデンティティ
Author(s)	野崎, 剛毅
Description	第2章
Relation	現代アイヌの生活と意識 : 2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その1 (日本語版・増刷版), 19-26
Issue Date	2012-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/48218">https://hdl.handle.net/2115/48218</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep01ja_004.pdf



## 第2章 アイヌの血統とアイデンティティ

野崎 剛毅

國學院大學北海道短期大学部准教授

### はじめに

民族をいかに定義するのかということは、極めて難しい問題を含んでおり、定説は確立されていない。一般には、「人種」が生物学的な差異を表すのに対し、「民族」は社会・文化的な差異を表すと言われている。だが、社会・文化の境界をどこで設定するのか、また、どのような文化の差異を重視するのかなどの問題がつきまとうため、明確な定義を設定することができないでいる。

そのようななかで、民族を規定する要素として頻繁に使用されるのが、血統、すなわち祖先が誰であったかと、民族のアイデンティティ、すなわち自分を何者と考えているかである。先住権などが問題になる際は、血統の問題が重要になってくる。また、たとえある民族の血が身体に流れていなくとも、自らを強くその民族に同定している場合は、構成員として認められる場合が多い。

そこで、本章では対象者の「血統」と「民族意識」について考察したい。まず、第1節でアイヌの血統の現状を確認する。明治以降、アイヌ民族の和人に対する同化・混血が急速に進み、現時点で「純粋な」アイヌ民族はほとんどいないといわれているが、実態はどうなのだろうか。なお、北海道は、アイヌ民族を定義する際に「血」を絶対視はしていない。北海道環境生活部が行っている「北海道アイヌ生活実態調査」でも、アイヌを「地域社会でアイヌの血を受け継いでいると思われる方、また、婚姻・養子縁組等によりそれらの方と同一の生計を営んでいる方」としている。アイヌ民族に関する多くの調査・資料でも、この北海道の定義に基づく数字が「北海道に住むアイヌ民族の数」として紹介されている。

続く、第2節では民族意識について考察をする。最後に、第3節でアイヌ民族としての誇りについて検討を加えることとする。

なお、本章においては、アイヌ民族と対置される「アイヌ民族でない日本人」のことを「和人」と表記することにする<sup>1)</sup>。

### 第1節 アイヌの血統

調査対象者5,703人のうち、父親がアイヌの血筋であるという者は2,386人（43.2%）、母親がアイヌの血筋であるという者は2,385人（43.1%）であった。父母の数字がほぼ同数となっているが、父母のどちらかだけがアイヌ民族という家庭も多く、両親ともにアイヌの血筋である者はそのうちの半数ほどの1,080人（全体の18.9%）である。祖父母の代までさかのぼっても和人の血が入っていない者は、さらに少なくなっている。父方・母方の祖父母まで、全員がアイヌであるという者は327人（5.7%）に過ぎず、それ以外の者は祖父母世代までのどこかで、和人の血が入ってきている。

また、逆に実の両親がともにアイヌの血を引いていないという者は、両親ともにアイヌの血を引いている者より多い1,837人（32.2%）いた。このうちの多く（1,166人）は、配偶者がアイヌの血

表2-1 アイヌの血を引く方はいますか（地域別）

	父親	父方祖父	父方祖母	母親	母方祖父	母方祖母	養父	養母
石狩支庁管内	282	142	171	359	210	240	10	9
	39.7	20.0	24.1	50.5	29.5	33.8	1.4	1.3
渡島支庁管内	91	55	27	43	23	19	3	3
	24.7	14.9	7.3	11.7	6.2	5.1	0.8	0.8
上川・宗谷・網走支庁管内	41	16	22	34	6	15	2	2
	46.1	18.0	24.7	38.2	6.7	16.9	2.2	2.2
十勝支庁管内	180	81	102	198	94	121	8	11
	51.4	23.1	29.1	56.6	26.9	34.6	2.3	3.1
胆振支庁管内	851	450	487	908	477	568	48	38
	43.6	23.0	24.9	46.5	24.4	29.1	2.5	1.9
日高支庁管内	727	385	329	632	288	348	29	25
	47.0	24.9	21.3	40.9	18.6	22.5	1.9	1.6
釧路・根室支庁管内	199	123	119	185	115	142	13	4
	43.4	26.8	25.9	40.3	25.1	30.9	2.8	0.9
未組織地区	15	11	9	26	13	19	1	0
	30.6	22.4	18.4	53.1	26.5	38.8	2.0	0.0
合計	2,386	1,263	1,266	2,385	1,226	1,472	114	92
	43.2	22.8	22.9	43.1	22.2	26.6	2.1	1.7

注)「無回答」を除く

をひく者であり、それ以外は養父母がアイヌ民族の者か、あるいは親の血筋が「わからない」という者などであった。

地域ごとにみても、表2-1の通り、渡島支庁管内はアイヌの血を引いている者が「いない」(108人：29.3%) もしくは「まったくわからない」(77人：20.9%) という者が合わせて50.2%と半数を超えている。また、釧路・根室支庁管内でも「まったくわからない」が16.8% (77人)、日高支庁管内でも11.1% (172人) と多くなっている。

一方、アイヌの血が比較的「濃い」地域は十勝支庁管内であった。両親ともアイヌの血を引いている者が32.6% (114人)、祖父母世代まで全員がアイヌの血を引いている者が10.6% (37人) いた。「まったくわからない」が多かった釧路・根室支庁管内は、不明が多い一方で血が濃い人も多く、祖父母世代までさかのぼった場合は13.1% (60人) と、十勝支庁管内よりも多くなっている。

年代別では、30歳未満において「まったくわからない」者が11.7% (104人) と最も多くなっている。しかし、かといって若い層ほど自分の家系について知らないというわけではない。年齢層が上がっていくにつれて、30代では9.0% (61人)、40代では8.5% (91人)、50代では6.7% (89人) と、徐々に「まったくわからない」者の割合は下がっていく。だが、60代では8.6% (81人)、70歳以上では9.1% (50人) と、60歳以上になると再びわからない者が増えていく。

なお、渡島支庁管内において「まったくわからない」者が際立って多くなっている原因については不明である。ただ、少なくとも渡島支庁管内では特に30歳未満の者や70歳以上が多いというわけではなく、年齢を介在した単純な擬似相関というわけではない。

単位：人、%

配偶者	いない	わからない	その他	両親	父方・母方 祖父母まで全員	データ数
210	6	37	5	130	43	711
29.5	0.8	5.2	0.7	18.3	6.0	100.0
81	108	77	4	9	3	369
22.0	29.3	20.9	1.1	2.4	0.8	100.0
32	0	7	0	18	1	89
36.0	0.0	7.9	0.0	20.2	1.1	100.0
121	2	12	4	114	37	350
34.6	0.6	3.4	1.1	32.6	10.6	100.0
704	37	94	29	384	124	1,954
36.0	1.9	4.8	1.5	19.7	6.3	100.0
544	48	172	7	309	58	1,547
35.2	3.1	11.1	0.5	20.0	3.7	100.0
146	33	77	0	105	60	459
31.8	7.2	16.8	0.0	22.9	13.1	100.0
13	0	2	1	6	1	49
26.5	0.0	4.1	2.0	12.2	2.0	100.0
1,851	234	478	50	1,075	327	5,528
33.5	4.2	8.6	0.9	19.4	5.9	100.0

## 第2節 民族意識

民族を規定する際、言語や文化などと並んで重視されるのが民族としての意識である。しかし、対象者の中で自分がアイヌ民族であるということを意識している者はあまり多くない。表2-2をみると、「まったく意識しない」が48.0% (2,486人) と半数近くになっている。特に、30歳未満に限れば66.8% (577人) と3分の2以上がアイヌ民族であることを意識していない。

一方、「常に意識している」者は全体で13.8% (712人)、「意識することが多い」者は11.4% (592人) である。30歳未満では、「常に意識している」が3.4% (29人) で、「意識することが多い」の5.1% (44人) を合わせても10%に満たない。

年齢層が高くなると、若い層よりはアイヌ民族であることを意識している者が多くなる。60歳～70歳では23.9% (215人)、70歳以上では26.4% (132人) と4人に1人はアイヌ民族であることを「常に意識している」と答えている。ただ、それでも、「まったく意識しない」がそれぞれ35.2% (316人)、38.2% (191人) と、常に意識している者より多くなっている。

民族意識は、年齢と比例して強まっていくが、あまり意識しない人々と比べるとどの年齢層においても少数派であるといえる。

表2-2 ご自分をアイヌ民族として意識することはありますか（世代別）

	常に意識している	意識することが多い	時々意識する	まったく意識しない	合計
30歳未満	29	44	214	577	864
	3.4	5.1	24.8	66.8	100.0
30～40歳未満	50	70	178	359	657
	7.6	10.7	27.1	54.6	100.0
40～50歳未満	96	117	317	488	1,018
	9.4	11.5	31.1	47.9	100.0
50～60歳未満	190	157	339	555	1,241
	15.3	12.7	27.3	44.7	100.0
60～70歳未満	215	134	233	316	898
	23.9	14.9	25.9	35.2	100.0
70歳以上	132	70	107	191	500
	26.4	14.0	21.4	38.2	100.0
合計	712	592	1,388	2,486	5,178
	13.8	11.4	26.8	48.0	100.0

注) 1. 単位は人および%

2. 「不明」「無回答」を除く（以下、同様）

表2-3 今後、どのように生活していきたいと考えていますか（世代別）

	アイヌとして積極的に生活したい	特に民族は意識せず生活したい	極力アイヌであることを知られず生活したい	その他	合計
30歳未満	31	212	25	4	272
	11.4	77.9	9.2	1.5	100.0
30～40歳未満	46	200	27	5	278
	16.5	71.9	9.7	1.8	100.0
40～50歳未満	80	374	31	11	496
	16.1	75.4	6.3	2.2	100.0
50～60歳未満	115	487	31	10	643
	17.9	75.7	4.8	1.6	100.0
60～70歳未満	119	372	21	11	523
	22.8	71.1	4.0	2.1	100.0
70歳以上	65	212	7	3	287
	22.6	73.9	2.4	1.0	100.0
合計	456	1,857	142	44	2,499
	18.2	74.3	5.7	1.8	100.0

注) 単位は人および%

さらに、今後の生き方についても、「アイヌとして積極的に生活したい」という者は18.2%（456人）にとどまっている（表2-3）。4人に3人（74.3%）は「特に民族は意識せず生活したい」と答えている。これもまた世代との関係が明確に表れており、「アイヌとして積極的に生活したい」者は70歳以上で22.6%（65人）であるのに対し、30歳未満ではほぼ半分の11.4%（31人）となっている。「極力アイヌであることを知られず生活したい」という者はどの世代でも10%を下回っているが、「特に民族は意識せず生活したい」と考えている者が圧倒的に多いという点では、すべての世代で共通している。

対象者の多くは、アイヌ民族としての積極的な意識を持っておらず、また、今後も意識せずに行こうと考えているのである。これはどのように解釈できるのだろうか。他の設問や自由記述を参考に3つの解釈を試みよう。

1点目として、過去の差別経験をはじめとする負の経験・記憶が、「アイヌ民族」というくくり自体を否定的にとらえさせてしまっているということが考えられるだろう。アイヌ差別の問題は、特に高齢者に対して大きな傷跡を残している。

表2-4をみると、「アイヌとして嫌だと感じる点」で最も多いのは「アイヌ差別の経験」(46.3% : 1,184人)で、続いて「身体的特徴」(34.1% : 872人)となっている。これを世代別にみると、30歳未満の最も若い世代では、「差別の経験」が29.7% (85人)であるのに対し、「身体的特徴」が40.6% (116人)と逆転している。しかし、それ以外の世代では、すべて「差別の経験」の方が多く、かつ世代が上になるほど、その割合が多くなっていくのである。70歳以上の世代では、実に59.4% (174人)が、嫌なこととしてアイヌ差別の経験をあげている。

アイヌ差別の経験を嫌だと感じる点にあげた者の63.5% (517人)が、それを感じさせた人として「アイヌ以外の友人・知人」をあげている。これは、「アイヌの友人・知人」(13.0% : 106人)や「学校の先生」(12.8% : 104人)などと比較して圧倒的に多い。このような差別の経験は、その後の人生についてまわり、アイヌ民族であることを積極的に捉えられない・捉えたくない意識を形成しているのではないだろうか。

2つ目の解釈は、アイヌ民族の多くが和人に同化してしまっており、民族を意識する場面が少なくなっているという点である。

また、それと関連して3つ目に、自由記述などをみると一種のコスモポリタニズムともいえる意識が見られる。アイヌ民族-和人という区別に関心を示さず、一日本人、あるいはより広く、地球市民として自分を位置づけようという立場である。自由記述にも、

「アイヌであろうが世界民族皆同じと思う」

「民族とか人種とか国境とか関係ない。みんなこの大地で共存している人類なのだから、私は私として生きる」

「人間として普通に生きてます」

「アイヌだからどーとか考えない」

「(略)皆同じ人間。日本人もアイヌ人もないです。すべて日本人、世界人です」(調査全体に対するコメント)

などという回答があるように、民族を意識せずに「世界人」として生きて行こうという考え方が、民族を前面に押し出した生き方を抑えているのかもしれない。

表2-4 アイヌとして嫌だと感じる点（複数回答・世代別） 単位：人、%

	アイヌの 歴史	アイヌの 文化	アイヌ 差別の 経験	生活 水準	身体的 特徴	その他	特に ない	データ数
30歳未満	7	4	85	31	116	3	101	286
	2.4	1.4	29.7	10.8	40.6	1.0	35.3	100.0
30～40歳未満	4	3	111	45	109	4	113	290
	1.4	1.0	38.3	15.5	37.6	1.4	39.0	100.0
40～50歳未満	16	11	222	97	200	13	151	497
	3.2	2.2	44.7	19.5	40.2	2.6	30.4	100.0
50～60歳未満	23	18	309	149	247	19	184	656
	3.5	2.7	47.1	22.7	37.7	2.9	28.0	100.0
60～70歳未満	9	11	283	139	133	11	159	536
	1.7	2.1	52.8	25.9	24.8	2.1	29.7	100.0
70歳以上	9	13	174	87	67	0	75	293
	3.1	4.4	59.4	29.7	22.9	0.0	25.6	100.0
合計	68	60	1,184	548	872	50	783	2,558
	2.7	2.3	46.3	21.4	34.1	2.0	30.6	100.0

表2-5 嫌だと感じさせた人・もの（複数回答） 単位：人、%

	親	親以外 の家族・ 親戚	アイヌ の友人・ 知人	アイヌ 以外の 友人・ 知人	学校の 先生	テレビ	本	その他	特に ない	データ数
差別経験あり	25	54	106	517	104	67	28	42	107	814
	3.1	6.6	13.0	63.5	12.8	8.2	3.4	5.2	13.1	100.0
差別経験なし	17	28	50	191	29	72	9	31	571	948
	1.8	3.0	5.3	20.1	3.1	7.6	0.9	3.3	60.2	100.0
合計	42	82	156	708	133	139	37	73	678	1,762
	2.4	4.7	8.9	40.2	7.5	7.9	2.1	4.1	38.5	100.0

### 第3節 アイヌ民族としての誇り

民族を意識しない者が、特に若い世代で増えている一方で、アイヌ民族であることに誇りを見出している者もまた、多く存在する。表2-6のように、アイヌとしての誇りとしては、「アイヌの文化」をあげる者が45.7%（1,167人）と最も多く、ついで「アイヌの歴史」が34.5%（881人）となっている。アイヌの文化については、「あなたにとって、『アイヌプリ』とはどのようなことを意味しますか」との問いに対して、以下のような誇りに満ちた回答が数多く記述されており、アイヌ民族が、自然を大切にする生き方を過去から現在まで変わらずに大事にしている様子がうかがい知れる。

「日常生活の全てにあるように思います。ものに対する考え方、人に対する考え方、心を中心としてアイヌ文化全てからにじみ出るものがプリだと考えます。自然に対する接し方や物に対する感謝、やさしさ、人に対するいつくしみとか、やはり心から発するもの、私は主人（アイヌ）嫁<sup>ママ</sup>に来て以来今もアイヌプリが大好きです。この世で一番のやすらぎやさしさを感じます」  
「自分自身を誇り高いアイヌであると自覚し、伝統的なアイヌ文化伝承につとめてアイヌ文化の発展につとめていくこと」

アイヌとしての誇りを教えたのは「親」が37.8%（666人）と多く、家族の中でアイヌの教えが脈々と受け継がれていることを示している（表2-7）。

しかし、その一方でアイヌ民族としての誇りが、若い世代になるにつれ徐々に薄れているという事実も存在する。誇りに感じる点が「特にない」者は、70歳以上では26.4%と4人に1人程度であるが、30～40歳未満では37.8%に、30歳未満では44.7%と半数近くにまで増えているのである。アイヌ文化に誇りを持つ者も、30～40歳未満では45.5%いるものの、30歳未満では36.2%と一気に10ポイント近く低下している。

表2-6 アイヌとして誇りを感じる点（複数回答・世代別）

単位：人、%

	アイヌの歴史	アイヌの文化	アイヌ差別との戦い	アイヌの偉人たち	身体的特徴	その他	特にない	データ数
30歳未満	71	102	35	34	22	7	126	282
	25.2	36.2	12.4	12.1	7.8	2.5	44.7	100.0
30～40歳未満	85	131	52	47	15	5	109	288
	29.5	45.5	18.1	16.3	5.2	1.7	37.8	100.0
40～50歳未満	178	231	109	95	23	10	156	498
	35.7	46.4	21.9	19.1	4.6	2.0	31.3	100.0
50～60歳未満	254	306	153	123	35	16	190	659
	38.5	46.4	23.2	18.7	5.3	2.4	28.8	100.0
60～70歳未満	184	256	157	106	36	10	140	529
	34.8	48.4	29.7	20.0	6.8	1.9	26.5	100.0
70歳以上	109	141	92	57	20	6	78	295
	36.9	47.8	31.2	19.3	6.8	2.0	26.4	100.0
合計	881	1,167	598	462	151	54	799	2,551
	34.5	45.7	23.4	18.1	5.9	2.1	31.3	100.0

表2-7 誇りを感じさせた人・もの（複数回答・世代別）

単位：人、%

	親	親以外の家族・親戚	アイヌの友人・知人	アイヌ以外の友人・知人	学校の先生	テレビ	本	その他	特にない	データ数
30歳未満	85	30	18	6	4	10	7	7	82	216
	39.4	13.9	8.3	2.8	1.9	4.6	3.2	3.2	38.0	100.0
30～40歳未満	88	42	21	11	5	19	15	4	76	229
	38.4	18.3	9.2	4.8	2.2	8.3	6.6	1.7	33.2	100.0
40～50歳未満	134	56	48	10	4	27	21	5	136	381
	35.2	14.7	12.6	2.6	1.0	7.1	5.5	1.3	35.7	100.0
50～60歳未満	158	46	78	14	3	21	21	12	152	428
	36.9	10.7	18.2	3.3	0.7	4.9	4.9	2.8	35.5	100.0
60～70歳未満	137	42	44	11	7	8	12	5	123	333
	41.1	12.6	13.2	3.3	2.1	2.4	3.6	1.5	36.9	100.0
70歳以上	64	19	24	7	6	4	2	3	67	175
	36.6	10.9	13.7	4.0	3.4	2.3	1.1	1.7	38.3	100.0
合計	666	235	233	59	29	89	78	36	636	1,762
	37.8	13.3	13.2	3.3	1.6	5.1	4.4	2.0	36.1	100.0

#### 第4節 小括

本章では、「民族」を定義する際の主要な要素となる「血統」と「民族意識」についてみてきた。「血統」については、従来いわれている通り、和人と「混血」が進んでいることが確認された。祖父母世代まですべてアイヌ民族である者は5.7%しかおらず、後はどこかで和人の血が入っている。

民族意識については、「アイヌ民族であることを常に意識している」者は全体の13.8%しかおらず、半数近くはふだん「まったく意識しない」。また、今後についても、アイヌ民族として積極的に生活したいという者は18.2%しかいなかった。この点について特に問題と思われるのは、若い世代において無意識化が急激に進んでいることである。年齢の高い層ではある程度の民族意識がみられるが、年齢が下がるにしたがって意識は弱くなっていく。そして、30歳未満になると、急激に意識が低くなるのである。民族としての結束を考える上で、意識の低下は極めて重大な問題といえる。

ただし、あるいはだからこそ、この「無意識化」をどのように解釈するかについては慎重にならなければならない。民族意識が薄まっていることが、アイヌ民族であることを隠そうとする消極的な意識の表れではなく、「民族」という区別自体への懐疑や、自らを地球人として位置づけようとする積極的な意識の表れである可能性もあるからである。

また、アイヌ民族としての誇りを持っている者も少なくはない。特に、文化や歴史に対する誇りは高い。誇りという点においても、若い層で弱くなるという傾向は見られる。しかし、アイヌとしての誇りを伝えているのは圧倒的に「親」である。今後、親から子へ、アイヌ民族としての誇りが若い世代へも継承されていくことも期待されるのである。

#### 注

- 1) アイヌ民族以外の、古くから日本列島に住むいわゆる「日本人」をどのように呼ぶかについては、様々な議論がある。小川正人は、比較的早い時期からアイヌ民族の間で存在した呼称であることと、日本人の民族意識に対する主体性が脆弱である以上、アイヌが用いた呼称を借用することが妥当であるとの判断から、蔑称ではなく歴史的な用語として「シャモ」という言葉を使用している（小川 1996：4）。また、中村康利は、「和人」という言葉に対する小川の指摘などを踏まえて、より中立的な語句として「多数派日本人」という言葉を使っている（中村 2009：20）。

#### 参考文献

小川正人, 1996, 『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会.

中村康利, 2009, 『アイヌ民族、半生を語る——貧困と不平等の解決を願って』さっぽろ自由学校「遊」.

(野崎剛毅)